

V 考 察

1 土器文様の構造的理義について

～「視覚認識構造」と「連鎖構造」に関する2,3の実例～

奥野 麦生

1. はじめに

これまでの土器研究の主流は、いわゆる文様帶系統論に基づく型式・編年研究であるが、この方法を検証・補完すべき新たな方法論の構築が今後の土器研究の活性化に必要であると考えている。

これまでの土器文様の分析は、ある型式のある文様帶を担う文様要素を抽出し、その変化の度合いで分類する方法が一般的であるが、今後は、土器に表象される文様全体とその構造を把握して分類・分析する研究法を併用してゆく必要性が高いものと考えられる。

筆者は、これまで白岡市内の発掘調査の成果を報告する中で、入耕地遺跡や前田遺跡出土の後・晩期の土器の文様帶に特徴的に見られるパネル状の文様の構造的分析を行ったり、山遺跡では加曾利E式土器について、またタタラ山遺跡では花積下層式土器について縄文土器の文様構造の分析を行ったりしてきた。

今回、上小笠原遺跡第2地点の第57号土坑の資料に注目し、これまで見てきた資料とともに、土器文様の全体構造をはじめ、文様帶同士のまたは、単位文様同士の「連鎖構造」や、文様構造同士をつなぐことによって生じる2次的構造である「視覚認識構造」などについて把握する文様帶内部の構造的理義についての考察を試みたい。

2. 研究略史

これまでにも、展開図や展開写真を用いた土器文様の構造的把握についての研究は行われているが、その方向性は必ずしも定まったものとはいがたい。確かに、縄文時代をはじめとする無文字社会の思考や抽象的な土器文様の意味について直接理解することは困難であるといわざるを得ないが、レヴィ・ストロースの示した一連の神話研究の成果や、近年中沢新一が試みた、考古学・民俗学と神話学との融合的研究を踏まえて、土器文様の構造的研究も次のステップに進むべき段階にあるといえよう。

土器文様の構造的研究について先鞭をつけたのは我孫子昭二であろう。その後、何人かの先学がこうした視点での挑戦を試みてきたが、体系的にまとめその後の研究の基礎を築いたのは、鈴木敏昭の「縄文土器の施文構造に関する一考察—加曾利E式土器を媒介として（序）—」（鈴木1983）であるといえよう。鈴木は、下南原遺跡（現・深谷市）出土の土器を端緒に縄文土器研究の視点を見直す提言ともいえる考察を行う中で、土器文様の構造研究の試みについて「文様同志の類似性、類縁性が指摘できない限りそれらの関連性を推考することが不可能であったレベルから、たとえ文様が違っていても、施文段階で共有されていた＜意識＞を通じて、それらの関係性が認識されるレベルに」できるものだと述べている。また、その視点は「（土器の）空間分割の原理と社会の組織原理とはいかなる関係にあるのかという、遠大な課題」へ注がれており、後続研究者の「灯台」となったといえよう。

さらに、鈴木の最近の論考「「土器にみる縄文人の思考」を考える」（鈴木2011）では、旧稿を引き継い

で縄文時代早期から晩期まで全体を通しての考察を行い、縄文人の間で世代や地域を超えて脈々と伝わる「心」に迫る論考が披瀝された。

一方、近年「認知考古学」の視点から桜井準也や小杉康らが土器文様の構造に言及している。特に、小杉の示した「可視範囲分割」に関する知見（小杉2006）は、私自身も十数年来研究してきた土器文様の構造的理解の主要テーマの一部として重要なものであるといえる。

そして石井匠は、『縄文土器の文様構造』（石井2006・2009）の中で、新たな土器文様の構造的研究の方向性を説いている。石井の研究は、ストロースや中沢をはじめ、先行研究をよく踏まえたもので、筆者との意見交換の成果も生かされたものとなった。分析した資料数は群を抜く。派生する諸問題にも一定の解釈を行っており、これまでの土器文様の構造的把握に関する研究から一步踏み出さんとする意欲に満ちた論考であると高く評価したい。しかし、土器文様の構造のバラエティの集約方向を非常に抽象的に「神話的思考」としてしまったところは残念に思う。言わんとするところは良くわかるが、軌道を修正してやはり考古学としての論理的整理が行われるべきであった。さもないと土器文様構造に関する研究の考古学的定着が遠のいてしまうのではないかと考えるからである。その点を度外視しても、石井の論考によって現時点での土器文様の構造研究の視点の整理が行われ、一定の共通認識を得ることができたと考える。鈴木のいうように、今後多くの研究者がこの問題に関心を寄せ、議論が活発化していくことを期待している。

3. 土器文様の構造的理解のための事例

さて、具体的に資料を見て行くこととするが、土器の文様構造解釈についての理解の一助として、本稿で使用する記号について次のとおりとしておきたい。

- ① 基本構造 → A、B、C
- ② 基本構造内の細分割 → a、b、c
- ③ 単位モチーフ → ア、イ、ウ
- ④ 視覚認識構造 → I、II、III
- ⑤ その他 → ①、②、③

(1) 上小笠原遺跡出土例（第83図）

上小笠原遺跡第57号土坑出土の資料である。本資料は、橢円形土坑に逆位で埋設されていた2個体の深鉢形土器のうちの1個体で、口径30cm、推定器高40cmを測るものである。底部を欠くものの、胴部文様はほぼ完存している。

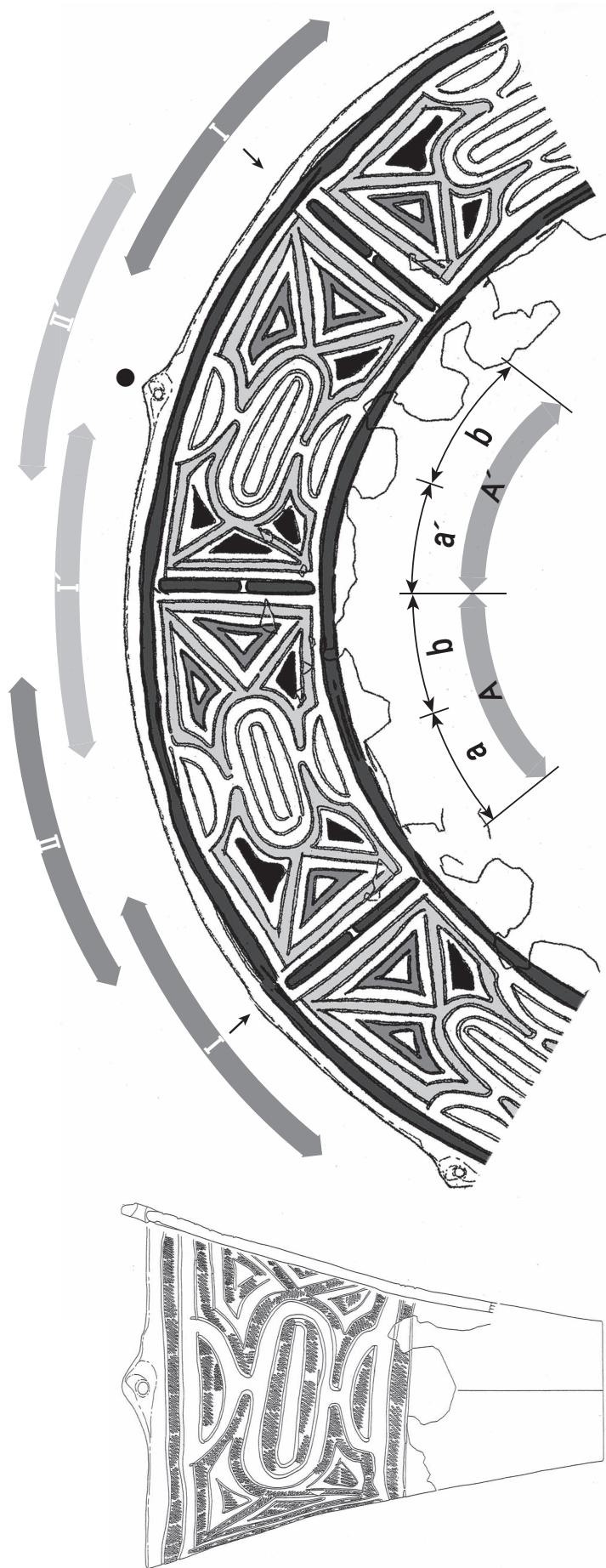
① 基本構造の把握

本資料の基本構造は2本の縦位分割線による2面構造 A + A' である。A をモデルとすると、A' では、パネル左端の縦長三角形区画内の地文施文部位に白抜き三角形がないことに気づく。また、A' パネル中央には突起を有する。誤差の範囲ともいえなくは無いが、A パネルと A' パネルの一番濃いトーンの白抜き部分のない三角の形状が対比されるもの同士でやや異なることもわかる。

② 基本パネルの細分

縦位分割線と橢円文の中軸線により4つに区分される a + b + a' + b の構造と理解でき、基本構造とあわせて標記すると A (a + b) + A' (a' + b) となる。

第83図 上小笠原遺跡出土例



③ 分帶構造の把握

本資料は、明確な分帶構造はもたないともいえるが、内包する分帶意識として楕円区画の中軸を成す白抜き線と2面のパネルを分割する垂下縄文帯中位の白抜き部分とを結ぶ線を分帶線と見立てることが可能である。

2面のパネルとも分帶線上部に位置する左右の横長三角形区画内は、左が地文充填、右は白抜きとなるが分帶下部の左右下の三角形区画では、2面のパネルとも同様に地文充填の三角形が配される。

④ 見かけの構造

楕円文正面と縦位垂下線正面（見かけの菱形正面）という見方が可能であり、楕円文+菱形文+楕円文+菱形文の4面構造と解釈できる。

⑤ 視覚認識構造

「視覚認識構造」を支える「視覚認識範囲」とは、土器を真横から見た時、主幹モチーフが歪むことなく正しく認識できる範囲をさすものとする。例えば、見かけの構造として認識した楕円文と菱形文を正面から見た時、それぞれ隣接するモチーフの端は視野には入るが、歪んでいるため正しく認識できないことがわかる。観察者が視点の移動なく把握できる範囲のことを「視覚認識範囲」と呼ぶこととする（註1）。

また、「視覚認識範囲」に規定される器面分割等は、展開図で把握できるモチーフ本来の器面分割構造（=基本構造）に対するものとして「視覚認識構造」として把握しておくこととする。

楕円文正面同士を比較するとⅡ'面には突起が存在する（●印）、楕円が左上がりに歪んでいる等の差異が見られる。見かけの菱形正面同士を比較すると、Ⅰ'面では右側三角形の白抜き部分が欠落することになる。式化すると $I + II + I' + II'$ と表すことができる。

展開図で把握した基本構造は $A + A'$ の2面構造に違いない。しかし、これとは別に立体としての土器を観察するときは $A + A'$ パネルの分割軸も「面」として機能している。結果的に $I + II + I' + II'$ の4面の視覚認識構造が浮き彫りになる。

⑥ 小結

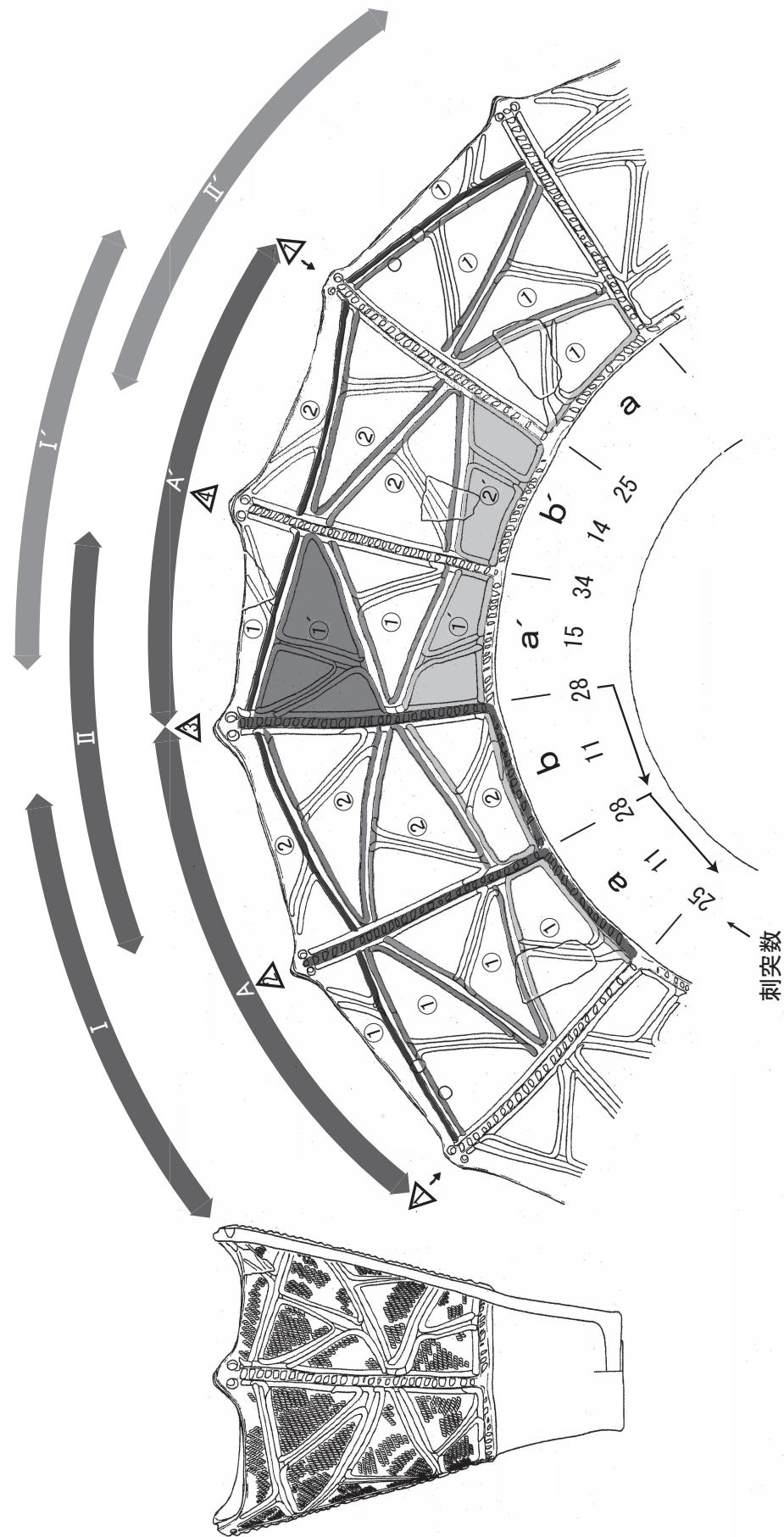
本資料は、基本構造である $A (a + b) + A' (a' + b)$ と、視覚認識による分割 $I + II + I' + II'$ の2者に支配されている。前者は作り手の、後者は観察者の視点といえなくもないが、Ⅰ'の縦位三角文の白抜きの拒否は、作り手が明らかに菱形文正面を意識していたものと見てよいだろう。もちろん、 $I + II + I' + II'$ の視覚認識構造の分割線は仮想したもので目に見える線はない。

視覚認識範囲の端は、隣接するそれと重複するため、明確な線引きはできないというあいまいさを予め内包するが、 $A (a + b) + A' (a' + b)$ と $I + II + I' + II'$ の分割線は異なるのである。製作者は視覚認識範囲を想定し、土器文様の対称性を別の対称性で包み込むことで連鎖構造を仕組んだものと解釈できる。

本資料の連鎖構造は、基本構造と視覚認識構造とのずれによって形作られている。

(2) 入耕地遺跡第2地点出土例（第84図）

入耕地遺跡は、埼玉県白岡市白岡に所在する複合遺跡で、縄文時代は後期・晩期の住居跡が検出されている。これまでに10次にわたる発掘調査が行われ、大きな成果が挙げられている。分析対象とした資料は、第2次調査第1号住居跡出土の資料で接合の結果ほぼ完形に復元できた。口径20.5cm、器高28cmを測る。



第84図 入耕地遺跡第2地点出土例

① 基本構造の把握

本資料は、4単位波状口縁を呈する深鉢形土器で、波頂部（それぞれ△・△・△・△）から垂下する鎖状隆帯によって4面に分割されている。

鎖状隆帯によって4面に分割されたパネルは△の分割線を挟んでA+A'の2面に大別できる。Aパネルは△を挟んでほぼ左右対称の構成をとる。これに対してA'パネルは△△間の2段目の三角形区画の処理に変化を加え非対称としている。

② 基本パネルの細分

分割された各面は交互の斜位区画線で横長三角形に区切られる。この横長三角形区画はさらに斜線で分割され小三角形区画に区分されるという“三角形パネルの重畠”が観察される。

また、鎖状隆帯によって分割された各パネルは斜位区画線の観察から、 $a+b+a'+b'$ となる。これを、基本構造とあわせて標記すると A (a+b) + A' (a'+b')と表現することができる。

さらに、各鎖状隆帯に施された突刺を見ると△下では、25、△下と△下が28、△下が34となる。また、下端区画上ではaとbはともに11であるのに対し、a'は15、b'は14である。このことから各パネルと鎖状隆帯との関係は、aと△、bと△が組み合わされていると理解することができる。

③ 分帶構造の把握

本資料は、明確な分帶構造をもたない。底部周辺の無文帯を画する鎖状隆帯の上は、基本的に1帯と理解できる。あえて斜位区画の重なりを“段”と表現し分帶に対比させて考えると、縦位分割された各パネルは横長の三角形（最下段は台形）4段に区分されると見ることができる。

波状を呈する口縁直下の1段目は下位の3段に比べ横に細長い。△と△を挟むように見かけの三角形を構成する。A、A'双方のパネルで同様の構造である。

2段目であるが、前述のとおり△△間の処理に変化を加えており、式であらわすと①+②+①'+②'となる。

3段目はA+A'構造の中核を成す区画で大型の見かけの菱形区画を形成するものとなる。構造は1段目同様①+②+①'+②'であり、安定した構造である。

4段目であるが、この段だけ台形区画となる。Aパネルでは△を挟んで下開きとなるように、A'パネルでは、上開きとなるような構造であり、式化すると①+②+①'+②'となる。

2段目3段目は合い向かいの横長三角形区画となる。おのの独立した区画と見ることもできるが、2つあわせた「帯」的な構造と認識できる。

④ 見かけの構造

4単位の波状口縁の土器であることから、それぞれの波頂部正面を想定してみると、各パネルの第1斜位区画線の向きによって波頂部△△は山に△と△は谷となる。谷部には波頂部から「ハの字」に開く三角形が形成されることがわかる。

⑤ 視覚認識構造の確認

前述のとおり4単位波状口縁の土器で、鎖状隆帯4本が垂下し器面を縦位に分割している。視覚認識範囲は単純に4面想定される。すなわち各波頂部を中心△中心のI、△中心のII、△中心のI'、△中心のII'となる。このとき、視覚認識範囲II、II'の対称性は4段目の細分線の向きによって破られることがわかる。視覚認識範囲IとI'を比較した場合、△を中心に見るI'2段目の三角形区画の処理は、視野の左

端に入るか入らないかという位置である。このことからも4段目の上開き下開きの斜線の向きは、大きな意味をもつものであることがわかる。

⑥ 小結

本資料は、基本構造である $A (a + b) + A' (a' + b')$ と視覚認識構造 $I + II + I' + II'$ の2者に支配されている。このことは、縦位区画及び文様帶下端区画に用いられる鎖状隆帶の刺突の数でも裏付けることが可能である。

本資料の連鎖構造は、(1) 同様に基本構造と視覚認識構造とのずれによって形作られているが、これに4単位の波状縁という構造が重ねられている。連鎖構造としては、基本構造と視覚認識構造と器形という3つの要素から成り立っていることがわかる。

(3) 前田遺跡出土例 (第85図)

前田遺跡は、埼玉県白岡市実ヶ谷に所在する縄文時代中期から晩期にかけての集落遺跡で、特に晩期の安行Ⅲa式期からⅢd式期にかけて大規模な包含層を伴う墓壙などが検出されている。分析対象とした資料は、平成元年の発掘調査で包含層中から出土した資料で、胴上半部の文様帶は、ほぼ完存する。口径は20.5cm、器高は25cmほどと推定されるものである。

① 基本構造の把握

姥山系譜の単沈線区画描出手法をとる土器である。文様帶は4帶に区分して把握できる。すなわち、口唇部突刺文帶、三叉状入組文からなる口縁部主幹文様帶、口縁部文様帶下端区画となる鋸歯文帶、胴部連弧文帶である。

文様帶は、この時期のほかの多くの土器同様に、器面を1周するように構成されており縦位の分割線は用意されていない。主幹文様は、文様帶内を上下に大きく振幅する鋸歯状単沈線によって、上向き下向き各5区画の三角形に区分される。

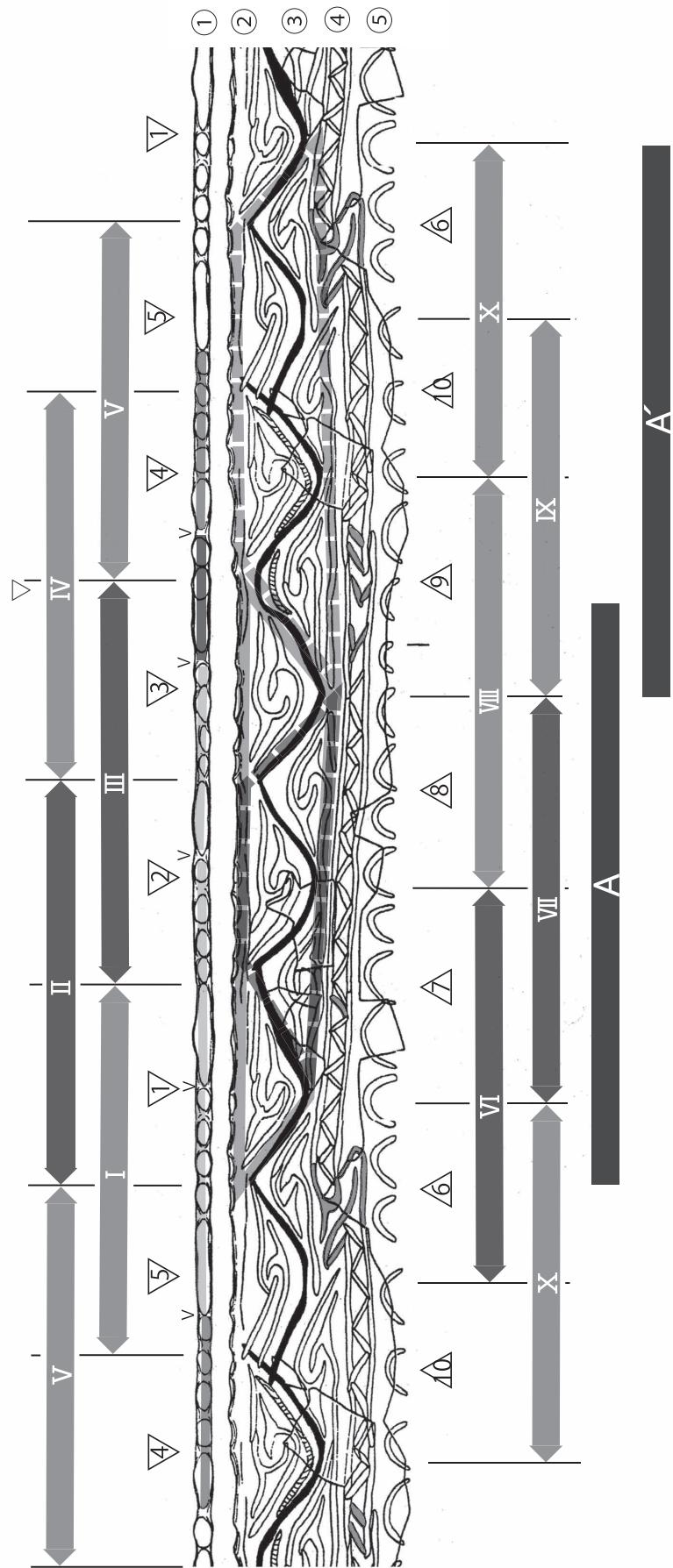
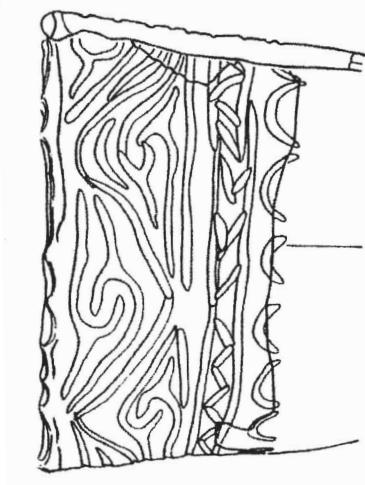
② 各文様帶の構造の確認

4帶に区分した文様帶ごとに対称性の破れの状況を確認してみよう。説明のために主幹文様帶の三叉状入組文に合わせて下向きの三角と上向きの三角として番号を付したので参考にされたい。

まず、①帶とした口唇部突刺文帶は、長楕円1と楕円4を1組として口縁を1周するものであるが、△の上では、長楕円に取り込まれた楕円1と楕円1という組み合わせ、▽の下では、長楕円の長さが他の半分ほどしかないことがわかる。これを式化すると、△の上から右方向に向かって、①+①+①+①'+①''となる。

次に、口縁部主幹文様帶は、単沈線による鋸歯状区画内に上向き下向きの三叉状入組文を交互に配したものである。鋸歯状の区画線の上を②帶、下を③帶と仮称する。▽△では、三叉状入組文と区画線との間に附加文となる沈線が見られる。また、△の三叉状入組文下端が長く伸び△の下を閉じる形となっている。▽では三叉状入組文の形状が他と異なることがわかる。②帶は、▽から右に向かって②+②+②'+②''、③帶は、△から右へ向かって③+③+③+③'+③となる。

三つ目に、④帶となる鋸歯文帶であるが、△の上で区画線自体が三叉化し、入り組むように構成されている。また、△では鋸歯を矢羽に替えている。△でも鋸歯の斜線を1本重複させていることがわかる。これを式化すると、△から右へ向かって④''+④'+④+④''+④となる。



第85図 前田遺跡出土例

最後に、胴部に付された連弧文帯⑤帯では、弧線の大きさにばらつきが目立つ。数は16と推定され、5で割り切れない可能性が高い。一部欠損部もあり断定できないが、空きスペースを考慮すると、△で4個となる可能性が高く、式化すると△から右へ向かって⑤+⑤+⑤'+⑤+⑤となる。

各文様帯相互の関係性について見てみると、口唇部突刺文帯は5区分されているが主幹文様帯の三角形区画とは連動しない。胴部連弧文帯についても、見かけ上口縁部文様帯とは連動しない可能性が高い。

③ 視覚認識構造の確認

本資料の視覚認識範囲は、三角形区画の中の三叉状入組文1つ1つを中心に据え、両側1つずつを加えた3区画を1面として捉えた台形又は逆台形10面と認識することができる。△を中心とする下向きの台形区画をIとして右向きに見ていく。Iでは②"+③"+②、△中心のIIと、△中心のIIIでは②+③+②、△中心のIVでは②+③'+②'、△中心のVでは②'+③+②"と見ることができる。同様に、▽中心のVIと、▽中心のVIIでは③+②+③、▽中心のVIIIでは③+②+③'、▽中心のIXでは③'+②'+③、▽中心のXでは③+②+③"となる。

要するに、本資料の視覚認識構造には必ず重複する区画を伴う「連鎖構造」が形成されていると理解できる。

④ 分割線によらない分割

本資料は、前項まで何度も述べてきたように、縦位分割は行われないタイプの土器である。全体構成は、鋸歯状区画によって上下に組み合う三叉状入組文10単位と見ることができる。しかし、口唇部の刺突文帯が暗示するように5つに集約されるものと考えられる。上向きの三角形区画1つと下向きの三角形区画1つの平行四辺形が1単位と解することも可能かもしれない。この平行四辺形の組み合わせに着目すると▽+△・▽+△・▽+△が基本構造で▽+△・▽+△と対峙する構造と見ることができる。①帯も概ねこれに呼応すると見てよい。

しかし、この構造に④帯と⑤帯は呼応しない。実は、平行四辺形を施文パターンの最小単位と捉えようすると、必ずどこかの文様帯に「破れ」が用意されていることに気付く。例えば、Aの中心▽で見てみよう。△との組み合わせでは、⑤帯が「破れ」、△との組み合わせでは④帯が「破れ」となるという具合である。主幹文様帯の平行四辺形の組み合わせだけでは基本構造の意識を反映しないようである。

それでは、これに視覚認識構造を加味してみよう。台形を意識してみると視覚認識構造II+VII+IIIとIX+V+Xの2面に大別できることがわかる。前者を基本構造A、後者をA'することとした。基本的に視覚認識構造では、口唇部の①帯は構造自体に関与しない。基本構造Aにおいても④帯の△や⑤帯の△に「破れ」があるが、「分割意識」を考えるときには度外視してよいだろう。明確な縦位分割線をもたない本資料も視覚認識構造を把握することで分割の意識がしっかりと存在することがわかる。

⑤ 小結

本資料は、主幹文様帯を構成する10単位の三叉状入組文とこれ等が上下に組み合わされる台形又は逆台形の視覚認識構造、さらに視覚認識構造3単位ずつによるAA'2面の基本構造に整理することができる。

一方、口唇部刺突文帯、口縁部文様帯下端区画となる鋸歯文帯、胴部連弧文帯はそれぞれ「破れ」をもつが、これらは主幹文様帯の分割意識とは異なる位置で基本構造の対称性を破っていることがわかる。各文様帯の「破れ」が最も重複する部分は、△の上あたりである。また、④帯とした鋸歯文帯の始点終点となる△や、三叉状入組文帯を画する大振幅の鋸歯状沈線が大きく食い違う△の上なども注意される。

このような文様帶ごとの「破れ」の位置の意図的な「ずらし」はなぜ行われるのだろうか。文様帶ごとに観察するとき、文様帶構造の「破れ」は、他の文様帶の「破れ」や「破り方」とは無関係に見える。しかし、5帶全ての文様帶を通して見たときに単純に「ここで切れる」と気取られないように巧妙に「破れ」をずらし、組み合わせて全体構成を行っているように思える。

本資料は、主幹文様のもつ単位性と視覚認識構造、さらに二項対立型の基本構造で3重の連鎖構造であるが、その他の文様帶との関係性の視点から見るとさらに3重、都合6重の連鎖構造をもっていると見ることができる。

(4) 上小笠原遺跡出土例2 (第86図)

上小笠原遺跡第57号土坑出土の資料である。(1)に示した事例と共に見られる資料である。楕円形土坑に逆位で埋設されていた2個体の土器のうちの1個体で、口径23cm、推定器高40cmを計る甕形土器である。胴下半を欠くものの、胴部文様の単位はほぼ確認できる。

① 基本構造の把握

本資料は、口縁部無文帶の下、括れる頸部に2条の沈線を引き立面図正面に12個の刺突が観察されるが、この刺突は単位化したり列化したりすることはない。胴部には、単節縄文の地文上に垂下する沈線文が施される。沈線文は、頸部から5cmほどの位置で「H」字状に連結し、連結部は外側に突出する。この垂下沈線文は胴部に6箇所施されるが、その間隔は一様ではなく縦位分割の意図も判然としない。

② 分帶構造の把握

基本構造を把握するために考慮すべき文様帶は、頸部に設けられた刺突文帶と胴部の沈線文帶の2帶である。本資料と同系統の資料の中には、口唇部に装飾突起等をもつものが見られるが、本資料にはこうした加飾は認められない。

③ 見かけの構造

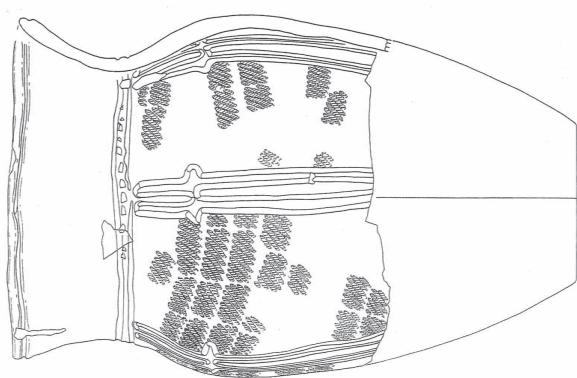
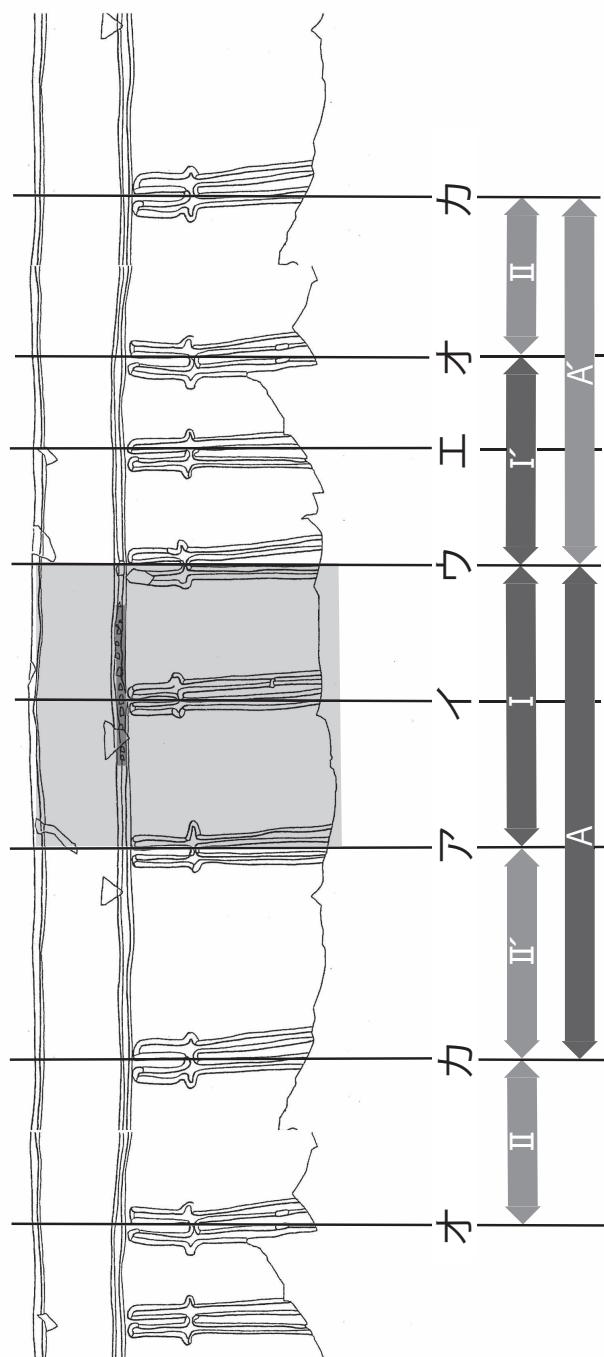
本資料は、胴部懸垂文帶に6個の沈線文が描かれる。しかし、その間隔は前述のとおり非常に不規則で6単位と見るのはいささか抵抗がある。頸部の刺突文に注目し一つの「正面」と見立てた立面図を見てみよう。立面図は視覚認識範囲を反映し、イを中心アとウまで視野に納めることができる。よって、この面が一つのモデルとなる3分割の視覚認識構造が成立する可能性が想定される。器面の構成比率を調べると、ア～ウは32.3%を占め、概ね1/3と見てよい。

もう一つの文様帶、頸部の刺突文帶について見てみたい。刺突のある部分は立面図に見える1箇所のみで、わずかな欠損部が認められるものの、大小12個の刺突が見られる。胴部と同様に器面の構成比率を確認すると17%となり、器面の1/6にあたる16.6%とほぼ一致する。これを偶然の一致と見るべきか否かは見解の分かれるところであろうが、筆者は偶然とは思わない。土器の作り手は、器面を3分割にも6分割にもできていたのであろう。

④ 視覚認識構造の確認

6個の懸垂文が2つずつ組みとなって3単位の縦位分割構造を形成すると仮定して器面の構成比率を計算してみると、ア～ウは32.3%、ウ～オは24.2%、オ～アは43.5%となる。これをもって3分割とするにはパネル間のばらつきが大きすぎる。懸垂文モチーフ2つという組み合わせを棚上げすれば、ア～ウは32.3%、ウ～カ44.2%、カ～ア23.5%という組み合わせもあり得る。しかし、オ～アの43.5%やウ～カの

第86図 上小笠原遺跡出土例2



44.2%という比率は、角度に直すと160度近い広角度であり、視覚認識範囲には収まらない。

器面構成比率に加えて器面分割軸に見立てる懸垂文と、その間に入る懸垂文の数に着目して見てみよう。

イを中心と見るア～ウとエを中心と見るウ～オは、懸垂文2本の間に懸垂文1本を挟む構造、これに対して、オ～カとカ～アは2本の懸垂文間に懸垂文を挟まない構造、この2者2組があることに気付く。頸部に刺突文を配し、ほぼ1/3の器面構成比率をもつ視覚認識範囲ア～ウは、器面の3分割を暗示しているものと思わせた。しかし、視覚認識構造を細かく検討することによって、実は4面構造が隠されていると理解することができる。すなわち、ア～ウのI、ウ～オのI'、カ～アのII、オ～カのII'である。これによって、本資料の基本構造の見方もはっきりする。ウを中心に左右に分かれる2面構成で、左からカ～アの視覚認識構造IIとア～ウの同Iを基本構造Aとすると、視覚認識構造I'のウ～オと同II'のオ～カを基本構造A'と理解することができる。

本例のように、モチーフらしいモチーフをもたず分割意識のあいまいな事例の場合、器面がどのような意識に支配されているかを認識することは簡単ではない。しかし、視覚認識構造という視点を活用することで土器に込められた製作者の意識を読み解くことができる。

⑤ 小結

本例は、前掲の3例とは視点の異なる事例である。器面に描出されたモチーフの規則性を読み取りにくい場合、どのようにして視覚認識構造を把握するかということを示す一例として紹介した。

まず、胴部の基本のモチーフとしてはア～カの6単位と考えられる。モチーフの施文間隔は不均一で、一見器面構成計画をもたず施文されたと判断されても仕方がないであろう。器面構成比率と懸垂文の数に着目して視覚認識構造を考えてみると、Iとしたア～ウとI'としたウ～オそしてIIとしたカ～アとII'としたオ～カの4つに分けて捉えることができる。さらにこれを括る基本構造は、ウを中心とした左右2面ウ・イ・ア・カとウ・エ・オ・カに集約することができる。

本資料の「正面観」を考えるとき視覚認識構造Iの器面に占める割合1/3は、あまりによく整っており器面3分割の思考が支配しているかのように思われた。しかし、両脇の視覚認識構造II（カ～ア）と同I'（ウ～オ）の器面構成比率はそれぞれ23.5%と24.2%であり、概ね1/4に近似する。さらにIの真裏に当たるII'のそれは、20%で1/5である。このように、一見全く無計画に施文されたかのように見られる本資料は、実に緻密な計算の上に成り立っていると見ることができる。

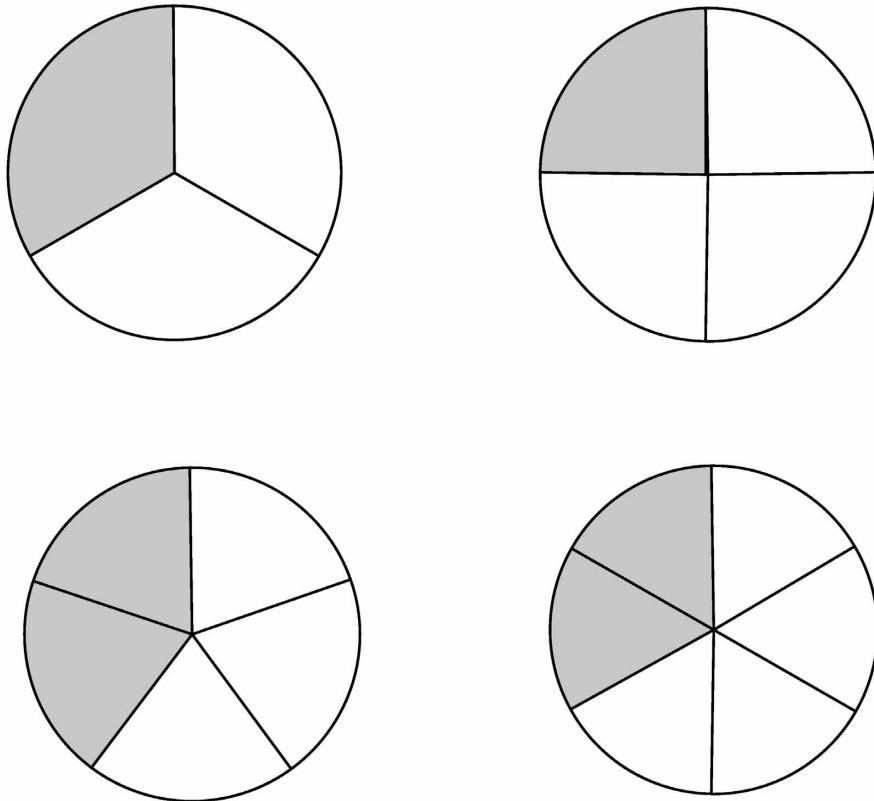
最後に、本例の連鎖構造を確認しておきたい。ア～カの単位モチーフと基本構造のA+A'さらに視覚認識構造のI+I'+II+II'の3重の連鎖構造であるが、これに、1/3、1/4、1/5、1/6という器面構成比率を加えて考えることもできるのである。

4. まとめ

(1) 器面分割と器面構成計画

器面を縦位に区画する「分割」は、時期や型式によって採用されたりされなかつたりする。しかし、円環志向の土器群の中にも、埋没してはいるものの分割に対する意識は存在する。単位モチーフの割付や波状縁、突起などがそうした要素として数えられる。

器面分割はモチーフ割付を行いやすくする意味も強くもっていたものと思われ、入耕地例等にはこの傾



第87図 器面分割と視覚認識範囲

(土器を上面から見た時の分割線と視覚認識範囲の相関関係：3単位・4単位・5単位・6単位の場合)

向が窺われる。しかしこれらの土器の器面分割軸と文様構造上の分割軸とは必ずしも一致するものではなく、見かけの分割（視覚認識構造）と文様構造上の分割とがあらかじめ用意されていたものと考えられる。このような器面分割の仕組みをもつ土器の中には、緻密な器面構成計画をもつものがあり（註2）、文様構造上の分割を隠すために見かけの分割を顕在化させていると思われる例すらある。

(2) 奇数単位土器と視覚認識範囲（第87図）

土器の器面分割は通常3～5単位程度のものが多い傾向にある。最も多く行われている4分割法を基準に、実際に視野に入り意味ある単位モチーフを読み取れる範囲を「視覚認識範囲」として観察するとき、観察者は分割軸あるいは単位モチーフを正面にその両側を視野に入れる。文様展開図を見るときとは45度ずれることになる。また、文様構造を理解して2分割構造の土器を観察する場合でも、180度すべての構造を意味ある状態で視野に入れることは不可能で、両端は歪んで把握しきれない。観察者の視野に入る有効範囲は120度から140度内外である。

器面分割の数と視覚認識範囲との相関を見ると、3分割のとき1面120度、5分割のとき2面で144度となる訳で、分割単位と視覚認識範囲とがほぼ一致する。しかし、分割線を正面にして見ることを考えると3分割では4分割同様視野の両端は認識できることとなる。これに対して、5分割の場合分割線を正面にすると、ちょうど視覚認識範囲に単位モチーフが収まることがある。晩期の安行式などで多用される5分割を志向する土器群の存在は偶然ではなく緻密に計算された結果と受け止めるべきである。

(3) 器面2分割に対する潜在的志向性と2分割を隠すレトリック

単位モチーフを連ねていくつかの面構成を行う土器の中に、見かけの分割の影に文様構造上の眞の器面分割を隠すように行うものがあり、その多くが2分割を志向する傾向の高いことがわかる。このような土器の場合、1面を「モデル」としてもう1面を「変形」として捉えることができる。変形は意図的で計算されたものである。

音楽の1形式である「ロンド」形式も主題と変奏を繰り返しながら進行する。音楽は形をもたないが、時空を超えた人の意識の中に、通奏低音として響くものがあると感じられる。

器面の2分割は「表と裏」「正と反」「真と偽」といった「二項対立」の抽象概念に通じ、これを「モデルと変形」という2面構成を行うことで、土器の器面に具現化したと見ることができる。

反面、2分割（2面構成）がはっきりとわかる構成の土器は少なく、（器形的に2分割を志向するものを除けば）多くは、2分割を気取られないように4分割に見立てたり、円環型に見立てたりして、眞の分割意識が直接表面に現れないようにしている。

視覚認識構造は、このような眞の分割が顕在化しないようにするレトリックであるともいえる。

(4) 連鎖構造

さて、土器の器面を縦に区分する「分割」を軸に「視覚認識構造」に関する考察をまとめてきたが、最後に、本論のもうひとつの主題「連鎖構造」に関する視点に関して整理しておきたい。

すでに述べたとおり縄文土器の文様には、見かけの分割と眞の分割とをもつものが存在し、見かけの分割と眞の分割とではその分割軸が異なる。(1)の上小笠原例は、基本構造と視覚認識構造の2者に支配される最も基本的な好事例である。(2)の入耕地例では、これに4単位波状縁という器形が加わる3者、(3)の前田例では、主幹文様のもつ単位性+基本構造+視覚認識構造の3者に加え、付属する文様帶3つが加わりなんと6重の連鎖が形成されている事例として紹介した。

器面を構成する要素である文様の単位モチーフ、突起や口縁部形態といった器形的特徴、分割、分帶、そして視覚認識構造などの要素は緻密に計算され複雑に連絡しながら構成されている。しかし、作り手はそのようなことは考えていないのかもしれない。彼らは意識下で平然とそれをやってのける。それが縄文人の「常識」なのである。鈴木の言葉を借りれば「縄文人の思考」である。

連鎖構造は、一種の螺旋構造であり、今のところ1つの文様帶内で帰結し、これと器形や分割が関わる(1)や(2)に類するパターンと、分帶構造を絡めた(3)に類するものとがある。分帶構造が関わる場合、より複雑な連鎖構造となるケースが多いことから、これを「多重連鎖構造」と仮称しておきたい。

また、本稿では触れなかったが、文様帶内での連鎖構造にあっても、より複雑なケースが存在することもわかっている。これについては稿を改めたい。

土器の文様構造の解釈は、従来型の「一面的」「断片的」解釈では情報量に限界があり、そればかりか誤解を招く恐れすらあるということを再認識する機会とすることことができた。

現在は、資料の分析を重ねている段階であるが、今後、ある程度時代や地域の指標となる代表的事例を一定量集積した段階では、文様構造のネットワークや構造の変遷、変化しない基本構造などを浮き彫りにすることができる、将来的に既存の土器型式や編年体系を別角度から捉えなおすことができれば、縄文土器研究の更なる進展に貢献できるものと考えている。

註

- 註1 石井が、「縄文土器の文様構造」の中で「可視範囲面」という用語を用いている。ほぼこの概念と共通するものだが、「可視」＝「見える」という受動でややあいまいさのある印象を改めたいと考え「視覚認識範囲」「視覚認識構造」という言葉を用いることとした。
- 註2 桜井は、土器文様の割付に関して民族例を引きながら「当時の文様施文方法があらかじめ印をつけるなどして、区画を均等に割り付けるといった行為は行わず、基本的に集積型割付法（追い回し施文）によって文様を施文している可能性が高い」（桜井2006）と述べている。しかし、割付角度が分度器で測ったように正確に行われているかどうかが問題なのではなく、彼らが予め文様構成計画をもった上で施文しているかどうかという観点で捉えるべきであると考えている。縄文土器の中には確実に文様割付や文様構成計画をもつと思われるものが存在する。前期羽状縄文系土器群の中には、縄文の割付線が残されるものがあることが知られている。少なくとも本論で取り上げる資料などは、かなり緻密な文様構成計画に基き施文されていると考えなければ説明できないであろう。

参考文献

- 石井 匠 2006 「縄文土器の文様構造」『國學院雑誌』107-7
- 石井 匠 2009 『縄文土器の文様構造』【未完成考古学叢書7】アム・プロモーション
- 奥野麦生他 1997 白岡町埋蔵文化財調査報告書第8集『入耕地遺跡（第2地点）』白岡町教育委員会
- 奥野麦生 1998 白岡町埋蔵文化財調査報告書第9集『前田遺跡』白岡町教育委員会
- 奥野麦生 2008 白岡町遺跡調査会調査報告書第7集『山遺跡－第2地点－』白岡町遺跡調査会
- 奥野麦生 2008 白岡町遺跡調査会調査報告書第6集『タタラ山遺跡－第2地点－』白岡町遺跡調査会
- 小杉 康 2006 「土器造形の発達とカテゴリー操作」『心と形の考古学－認知考古学の冒険－』同成社
- 桜井準也 2004 『知覚と認知の考古学－先史時代人の心』雄山閣
- 桜井準也 2006 「土器の文様区画と認知構造－文様の割付と「うつわ」の認知の問題をめぐって－」『心と形の考古学－認知考古学の冒険－』同成社
- スティーブン・ミズン 1998 『心の先史時代』青土社
- 鈴木敏昭 1983 「縄文土器の施文構造に関する一考察－加曾利E式土器を媒介として（序）－」『信濃』35巻4号 信濃史学会
- 鈴木敏昭 1984 白岡町埋蔵文化財調査報告書第2集『茶屋遺跡』白岡町教育委員会
- 鈴木敏昭 1987 「加曾利E II式土器における施文構造の変容について－埼玉県北西部を中心に－」『埼玉の考古学』新人物往来社
- 鈴木敏昭 2011 「「土器にみる縄文人の思考」を考える」『埼玉県立史跡の博物館紀要』5号
- 谷井 彪 1977 「勝坂式土器の文様構造について」埼玉考古第16号
- 谷井 彪 1979 「縄文土器の単位とその意味」『古代文化』31-2・3
- 中沢新一 2002 『熊から王へ』カイエ・ソバージュII講談社
- 中沢新一 2004 『対称性人類学』カイエ・ソバージュV講談社
- 中沢新一 2006 『芸術人類学』みすず書房
- 中沢新一 2008 『狩猟と編み籠 対称性人類学II』講談社